

建具からみた現代住宅の空間構成に関する一考察

日大生産工(院) ○岡本泰郎 日大生産工 浅野平八

1. 研究の目的

近年、生活の多様化からnLDKを超える新しい住まいが求められている。住宅に関して言えば、そうした新しい住まいの提案者のひとりとして建築家の山本理顕が挙げられる。その提案する空間構成を理解するために、本論文では建具に着目する。建具は、空間と空間の間にある仕切りであり、つなぎ目となる空間制御装置である。建具の分析によって空間とその境目をより顕在化し、山本理顕の作品の住まい方を考察することが本研究の目的である。

2. 研究の方法

本論では、山本理顕の作品事例より、「岡山の住宅」(以下「岡山」)、「熊本県営保田窪第一団地」(以下「保田窪」)の2事例で検証・考察を行う。その検証方法を以下に示す。

1) 建具はその素材によって透視性が異なる。そこで、建具の透視性を①透視、②半透視、③不透視の三段階に分類する(図1)。

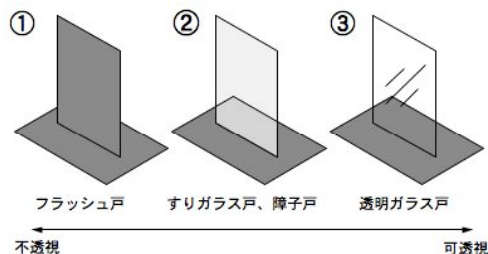


図1

2) 平面図に分類した建具(図1)をプロットし、空間配列と建具の透視性のみ抽出したものを図式化する。

3) 作成した図式から、山本理顕の提案している空間配列が建具に顕在化しているかを考察する。

3. 「閼」の概念と事例検証について

3. 1 「閼」について

「閼」*1とは、空間ユニットをつくりだす装置である(図2)。「閼」によって閉じた空間が作りだすならば、その「閼」の奥にある空間(B)こそが外部に対してプライバシーが高く、その「閼」にあたる空間の外(A)がパブリックな空間である。また、その空間ユニットをたとえば住宅というように呼ぶこともできる。あるいはもっとスケールの大きい集合住宅のような共同体を規定するような空間ユニットを想定することもできる(図3)。

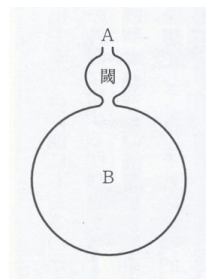


図2

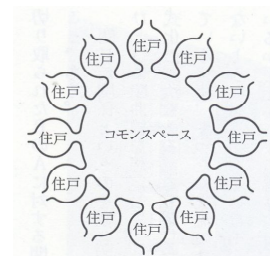


図3

A study on the space formation
of the contemporary houses shown the fixture

Tairo OKAMOTO, Heihachi ASANO

3. 2事例検証（「岡山」の場合）

「岡山の住宅」は両親と子ども一人の三人家族が住む住宅で田園風景の中にある。住宅平面プランおよび建具の透視性を図4に示す。

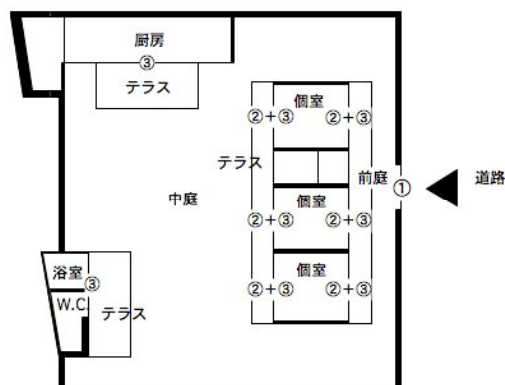


図4

中庭を囲む形式で、個室・厨房・浴室が離散的に配置されている。それぞれの部屋の前には大きな庇で覆われたテラスがあり、そこが住み手の居住生活の中心となる計画である（図5）。



図5

使用されている建具の形状・開閉タイプを図6に示す。3つある個室はすべて二重の建具となっていて外側から透明ガラス戸→障子となっている。厨房・浴室は透明ガラス戸になっている。つまり、中庭に面する共用室はすべて③の建具が存在し、個室は②と③の両方の透視性を持っていることになる。

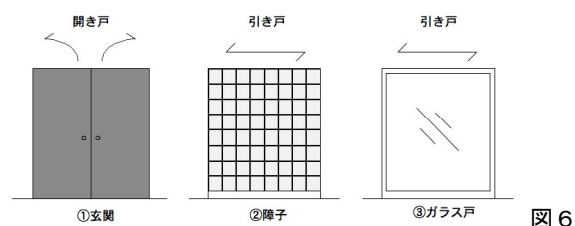


図6

次に空間配列と建具の透視性のみを抽出したものを図7に示す。



図7

中庭に面した部屋と個室の玄関側はいずれも「引き戸」になっている。建物を囲む外壁は、中庭とテラスが生活の中心の場であるので、外部からの視線を完全に遮断している。特に全面道路側には、小さな玄関をのぞいて高さ6m、長さ20mの壁が直立し、外部と内部を隔絶している。空間の配列としては、玄関から個室を通過し中庭や共用部へと進んでいくようになっている。

3. 3事例検証（「保田窪」の場合）

「熊本県営保田窪第一団地」は、110戸の住戸からなる集合住宅であり、3つの住棟と集会室が中央広場を完全に取り囲む構成となっている。完全に閉じられた中央広場に入るためには住戸（もしくは集会室）を通過しなければ中央広場に入ることができない（図8）。そのため、住戸は道路側と中央広場の二方向に対して出入り口を持っている。つまり、前に挙げた図2に近似した空間配列をしている。

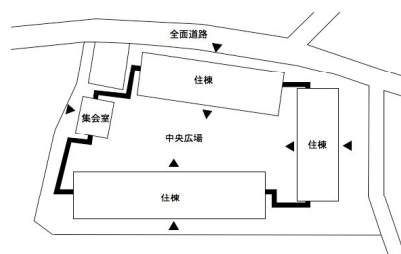


図8

住戸ユニットの平面プランは階ごとにA、B、C、Dの4プランになっている（図9）。Aプランは3つの和室と家族室（居間・食堂）が隣接・連続したプランとなっている。B、C、Dプランは、「コート」または「吹き抜け+ブリッジ」という屋外空間がユニットの中央に位置し、両端に向かい合うように和室と家族室がある。

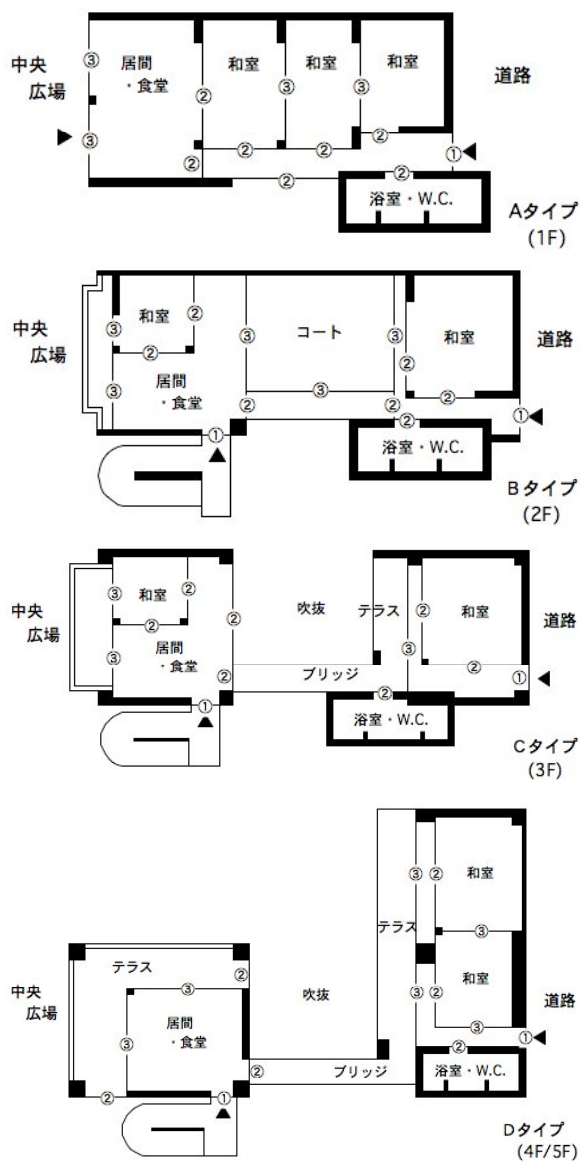


図 9

次に、これら 4 タイプの住戸ユニットに共通した空間配列と、建具の透視性のみを抽出したものを図 10 に示す。

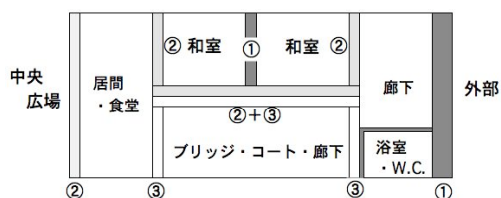


図 10

家族室には、中央広場への出入り口があり、すりガラス戸が用いられている。また、外部への出入り口（玄関）は不透視の戸を用いている。これをユニットへのアクセスでみると、外部に対しては①の建具であるのに対し、中央広場へ

のアクセスは②の建具を用いている。このことから、「保田窪」の住戸ユニットは外部に対する閉鎖性が高く、また中央広場に対しては開放性が高いことが考えられる。さらに、使用されている建具の形状・開閉タイプを図 11 に示す。ユニットに必ず配されている「和室」の建具には障子が用いられ、その外側であるユニット中央への開口部は透明ガラス戸がある。つまり、「和室」は、「岡山」の「個室」と同様に②と③の建具によって開放性が調整できるようになっていることがわかる。ただし、「和室」が隣接する場合、その隣室境界の間仕切りのみ襖になっている（図 12）。これにより、和室同士間は連続性の考慮された半独立空間となっていることがわかる。

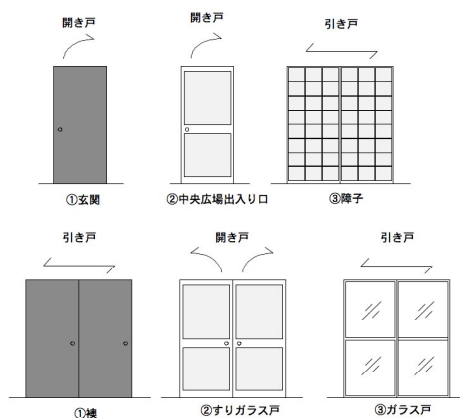


図 11



図 12

4. 事例からみた「建具」と「関」の関係

1) 一般的な現代住宅の空間配列、および山本理顕の提唱する現代住宅の空間配列を図式すると次のようになる（図 13）。山本理顕の提唱する空間配列は、「個室」または「住戸ユニット」を「関」とし、住戸ユニット内でパブリックな空間としている。一方、「LDK」または

「共用部（コモン）」は「まち（外部）」から閉鎖されたプライバシーな空間となっている。

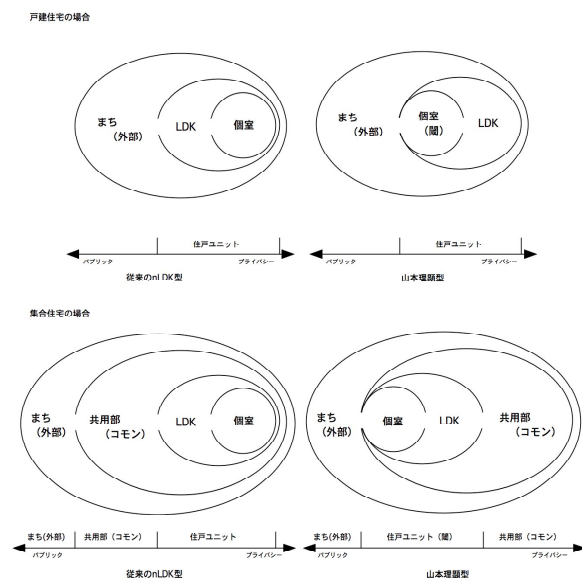


図 13

2) 「岡山」の事例をみると、個室は前庭・中庭の両側に向けてガラス戸＋障子と二重の建具である。つまり、個室の建具に特徴がみられる。ガラス戸という最も開放性の高い建具と、障子という半透視の建具の二重の構成によって、空間の連続性が調節できるようになっている。これは山本理顕の提言している「関」が、この個室に顕在化していることがわかる。また、玄関が完全な不透視性の戸が用いられ、中庭に面した厨房・浴室・書庫の建具にガラス戸が用い最大限の開放性が与えられている。このことから、個室からの空間のひろがり展開されていることがわかる。

続いて、「保田窪」の事例をみると、これも住戸ユニットの中央に向けて空間の連続性が調整できるようにガラス戸があり、和室はその開放性を調整できるように障子が用いられている。さらに、住戸ユニットを「関」とすることで、中央広場をプライバシーの空間としている。これも外部への戸が不透視、中央広場への戸が半透視であることから「関」による空間構

成がみられる。

これらにより、分析・考察した2事例はともに、山本理顕の言う「関」の概念に当てはまることであり、建具で「関」を顕在化させていると考えられる。

5. 結論

今回の事例分析によって、建具から空間構成概念の顕在化することができることがわかった。このことから建具の分析によって、室構成だけでは検証の難しい空間の連続性・独立性を検証することができると考えられる。今後、山本理顕の作品以外の現代住宅作品でも同様の分析を行うことで現代住宅における空間構成を解析することが課題である。

註

*1 関（しきい）：参考文献1によると、「ふたつの相互の性格の異なる空間の間にあって、そのふたつの空間を互いに切断し、あるいは接続するための空間的な装置のことである。つまり、外部と交流する場所、仕事をする場所であり、日本の座敷のように外に開く場所であるとしている。一方、参考文献2によれば、「外部に対して入出力を制御しつつ、内部秩序を維持するための装置ないしは機構である」と定義している。

参考文献

- 1) 山本理顕『新編・住居論』平凡社（2004）
- 2) 原広司『集落の教え100』彰国社（1998）
- 3) 野口留美子、谷口汎邦「計画事例にみる近隣空間の関・核構成計画理念とその方法」日本建築学会計画系論文報告集 第383号（1988.1）
- 4) 上野千鶴子『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』平凡社（2002）
- 5) 『新建築』新建築社（1993.1）
- 6) 山本理顕『建築の可能性、山本理顕の想像力』王国社（2006）